

鳥取県米子市

車尾 くずも 7丁目 にし 西濱 はまなか 遺跡

2004

財団法人 米子市教育文化事業団

序

米子市は、北に雄大な日本海、東に秀峰大山を臨む豊かな自然環境に恵まれています。また、このような環境の中で、いにしえより人々が生活を営んでおり、市内各地に数多くの遺跡が存在し、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

当事業団では、この度、車尾上福原線緊急地方道路整備工事に伴い、米子市車尾7丁目所在の車尾7丁目西濱中遺跡の発掘調査を行ってまいりました。当調査は米子平野における2か所目の調査で、近世以降の遺構を確認し、古墳時代前期頃の古墳の存在が示唆されるなど、大変貴重な成果を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心より厚く感謝申し上げます。

平成16年（2004年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 山岡 宏

例　　言

1. 本書は鳥取県米子市車尾7丁目において実施した3・4・31車尾上福原線緊急地方道路整備工事に伴う車尾7丁目西濱中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鳥取県米子地方県土整備局（現鳥取県西部総合事務所県土整備局）の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 発掘調査の実施にあたっては、珪藻分析を業者に委託した。
4. 本書は高橋が執筆、編集した。
5. 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 本書に用いた方位は第3図が真北を示している以外は国土座標上の北を示し、高度はすべて海拔高である。また、座標値は国土座標第V系を用いた。なお、溝状遺構の主軸方向は国土座標上の北との角度で示した。
2. 第2図は1:2,500 国土基本図「米子境港都市計画計画図（米子市）24」を拡大複製し、加筆したものである。また、第3図は国土地理院発行の1:25,000地形図「米子」、同「母里」、同「淀江」、同「伯耆溝口」を縮小複製、合成し、加筆したものである。なお、第17図は国土地理院発行の1:25,000地形図「米子」を縮小複製し、加筆したものである。
3. 本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
S D : 溝状遺構
4. 本文中、挿図中、写真図版中及び遺物観察表中の遺物番号は一致する。
5. 遺物観察表中の※は復元値、△は残存値を示す。

目 次

序例
凡
目
次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 検出した遺構と遺物	8
第3節 遺構外出土遺物	14
第4章 自然科学分析	21
車尾7丁目西濱中遺跡の珪藻分析	21
第5章 まとめ	24
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 グリッド設定図	1
第2図 調査区配置図	2
第3図 調査地及び周辺遺跡分布図	7
第4図 土層図	9~10
第5図 遺構配置図	11~12
第6図 S D - 01・02遺構図及びS D - 01出土遺物実測図	13
第7図 S D - 03~08遺構図及びS D - 03出土遺物実測図	15
第8図 第8層出土遺物実測図（1）	16
第9図 第8層出土遺物実測図（2）	17
第10図 B層出土遺物実測図	17
第11図 第7層出土遺物実測図	18
第12図 第4層出土遺物実測図	18
第13図 C層出土遺物実測図	19
第14図 第2層出土遺物実測図（1）	19
第15図 第2層出土遺物実測図（2）	20
第16図 試料採取位置図及び土層柱状図	21
第17図 米子平野平地部における古墳関係遺物出土遺跡分布図	25

挿 表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表	6
表2 車尾7丁目西濱中遺跡の珪藻分析結果	22
表3 遺物観察表	26

図 版 目 次

図版1 1区全景（北から）	図版4 2区全景（北から）
1区全景（南から）	2区全景（南から）
図版2 S D - 0 1（北から）	2区第8層 遺物（11）出土状況
S D - 0 1（南から）	図版5 出土遺物（1）
S D - 0 2（東から）	図版6 出土遺物（2）
図版3 S D - 0 2（南から）	図版7 出土遺物（3）
S D - 0 3・0 5（南から）	図版8 出土遺物（4）
S D - 0 3・0 5（北から）	図版9 硅藻の顕微鏡写真

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が事業主体である3・4・31車尾上福原線緊急地方道路整備工事に伴い、米子市車尾7丁目地内において実施したものである。

車尾上福原線緊急地方道路整備工事は、米子市街地の南部から東部にかけての渋滞緩和を目的としたもので、工事は道路を新設するとともに、既存の道路を拡幅整備するものである。

工事予定地は周知の遺跡内には位置してはいないが、調査地の西側に隣接する国立米子病院では、病棟工事中に円筒埴輪が発見されている⁽¹⁾。そこで、工事に先立ち、埋蔵文化財の保護と事業計画との調整について関係諸機関で協議がなされ、平成14年度（2002年度）に米子市教育委員会によって試掘調査が行われ、古墳時代と近世の遺物が確認された。これを受けて鳥取県米子地方県土整備局（現鳥取県西部総合事務所県土整備局）は米子市教育委員会と協議を行い、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。調査の対象となった遺跡は、車尾7丁目西浜中遺跡である。これにより、平成15年度（2003年度）に財団法人米子市教育文化事業団が調査を実施した。

第2節 調査の経過と方法

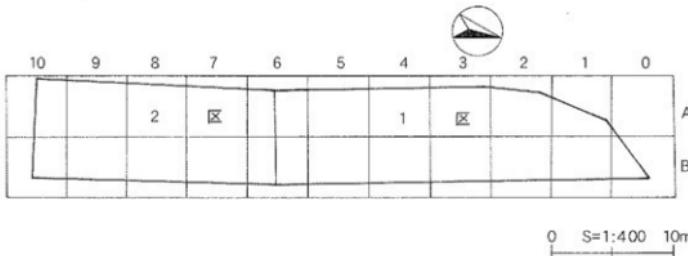
現地調査は平成15年（2003年）6月に着手した。

調査は、排土を場外に搬出せず、また、その置き場がないため、調査区を2つに分けて行った。調査区は北側を1区、南側を2区とし、1区→2区の順番で調査を行った。

調査地の現況は工場の社宅地で、現地表面下20~40cmにわたって造成が行われているため、調査に先立つて重機によりこの造成土を除去した後、グリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては、調査区が狭長な範囲であるため、国土地標にとらわれず、調査区の中心線を主軸に5m画のグリッドを設定した（第1図）。南北軸は北から0~10、東西軸は西からA、Bとした。グリッド名は北西側の杭の名称をとって呼称することとした。なお、遺構外出土遺物については、グリッド毎に一括して取り上げた。グリッド設定後は、人力により掘り下げを行い遺構、遺物の検出を行った。

現地調査は平成15年（2003年）7月に終了した。

現地調査終了後は、出土遺物の整理作業を行い、その後、調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行した。



第1図 グリッド設定図

旧石器時代

米子市に限らず、鳥取県内では旧石器時代の遺構は明らかではないが、大山山麓を中心にいくつかの旧石器が発見されている。淀江町小波では東山・杉久保塩系統のナイフ形石器、米子市泉中峰遺跡ではナイフ形石器などが発見されており、旧石器時代～縄文時代草創期とされる有舌尖頭器が米子市奈喜良遺跡（14）、吉谷龜尾ノ上遺跡（16）、西伯町福成石佛前遺跡（21）から出土している。

縄文時代

県内では草創期の土器は発見されてはいないが、大山山麓で有舌尖頭器が出土していることから、この地域でこの時期の遺構・遺物が今後確認されるものと思われる。

早期には大山山麓の台地上の小河川流域に遺跡の分布が多く見られる。米子市上福万遺跡（51）では多量の押型文土器や石器が出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が検出されている。また、米子市尾高御建山遺跡（41）、泉中峰遺跡、泉前田遺跡からも少量の押型文土器が出土している。

前期には大山山麓では早期から継続する遺跡が多い。一方、中海沿岸では早期末～前期初頭に集落の形成が始まり、大山山麓から海浜部の低湿地への進出が窺える。これらは中海沿岸の拠点的な集落となるものもあり、島根県美保関町崎ヶ鼻遺跡、松江市タテチヨウ遺跡、西川津遺跡、米子市目久美遺跡のように中期以降も長期間継続するものもある。

この時期の遺跡には米子市目久美遺跡（2）などがある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石錘、動植物遺体が出土している。

中期には遺跡の数が減少する傾向にあり、現在のところあまり明確ではないが、目久美遺跡ではドングリ貯蔵穴が多数検出されている。

後期から晩期には大山山麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。

この時期の遺跡には米子市目久美遺跡、青木遺跡（23）、奈喜良遺跡、東宗像遺跡（9）、大袋丸山遺跡（31）、西伯町福成石佛前遺跡、福成早里遺跡（22）などがある。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退とともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期の遺跡には縄文時代晚期から継続あるいはこれに隣接するものが多く、中海沿岸の低湿地や扇状地端に拠点的な遺跡が形成され、河川を潮上した小平野をひかえる丘陵上にも遺跡が形成されるようになる。

目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落を形成しており、米子市長砂第1遺跡（4）でも前期後葉～中期初頭の遺構群とともに水田が確認されている。また、当地域は環濠を伴う集落が比較的集中しており、前期末～中期前葉のものには米子市尾高御建山遺跡、淀江町今津岸の上遺跡、会見町諸木遺跡（33）、宮尾遺跡（34）、天王原遺跡があり、いずれも断面V字状の環濠が確認されている。

中期には前期の拠点的集落が継続して営まれ、農耕技術の向上、人口増加等を背景に遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。

米子市目久美遺跡、長砂第2遺跡（5）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期前葉～中期後葉と中期後葉～中期末の2面の水田が検出され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の2面の水田が検出されている。

低湿地の微高地上に立地する遺跡には米子市米子城跡下層、錦町第1遺跡、四日市町遺跡がある。しかし、中期後葉～後期になるとこれらの低湿地や低湿地の微高地上に立地する遺跡の多くは消滅し、これにかわって周辺の丘陵や台地上に遺跡が形成されるようになる。その背景として社会的情勢の変化等が考えられるが、目久美遺跡では後期前葉に大規模な洪水によって集落及び水田が廃絶しており、自然災害的要因も影響して

いる可能性がある。

この他に、この時期の遺跡には米子市奈喜良遺跡、吉谷上ノ原山遺跡（18）、奥谷堀越谷遺跡（11）、東宗像遺跡などがある。

中期後葉～後期には前期～中期の拠点的集落は継続するものは少なく、米子市青木遺跡、福市遺跡（24）、淀江町妻木晚田遺跡、会見町・岸本町越敷山遺跡群のように新たに拠点的集落が形成される。また、この時期には遺跡は低地から高丘陵へ移動する傾向にあり、このような遺跡には周辺では西伯町福成石佛前遺跡などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

また、中期後葉～後期にかけて大山北西麓には環濠集落と四隅突出形埴丘墓がセットとなった遺跡が見られるようになる。このような遺跡には、米子市尾高浅山遺跡（45）、淀江町妻木晚田遺跡があり、尾高浅山遺跡では3重の環濠と四隅突出形埴丘墓が確認されている。妻木晚田遺跡は我が最大級の弥生集落で、集落と環濠及び多数の四隅突出形埴丘墓が確認されており、特に、これらの四隅突出形埴丘墓は山陰地域の平野部における最古のものとして注目される。

この他に、この時期の遺跡には米子市奈喜良遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡（19）、東宗像遺跡、池ノ内遺跡（3）などがあり、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

古墳時代

前期の古墳には米子市日原6号墳（12）、石州府29号墳（50）などがある。日原6号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壙墓2基が検出されている。石州府29号墳は割竹形木棺を埋葬施設とし、獸帶鏡が出土している。また、青木遺跡では小形の方墳10基と円墳7基からなる古墳群とこれらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では24基からなる土壙墓群が検出されている。

この時期の集落には米子市青木遺跡、福市遺跡、諏訪西山ノ後遺跡（30）、大袋丸山遺跡、長砂第3遺跡（6）、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

中期の古墳には米子市水道山古墳（7）、会見町三崎殿山古墳（32）があり、水道山古墳からは仿製斜線八神鏡が出土している。三崎殿山古墳は全長108mの前方後円墳で、この地域を支配した有力な首長墓である。

この時期の集落には米子市青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、樋ノ口第3遺跡（26）、吉谷トコ遺跡、長砂第3遺跡（6）などがある。

後期には群集墳がつくられるようになり、周辺には横穴式石室を主体とする宗像古墳群（10）、導入期の横穴式石室である竪穴式横口式石室と箱式石棺を主体とする東宗像古墳群（9）などがある。

また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始され。周辺には大塔山横穴墓群（8）などがある。

この時期の集落には米子市青木遺跡、樋ノ口第4遺跡（25）、奥谷堀越谷遺跡、長砂第3遺跡、東宗像遺跡、西伯町福成早里遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

白鳳時代～平安時代には仏教文化が盛行し、多くの寺院が建立される。この時期の寺院には石製鷲尾を有し、変形の法起寺式伽藍配置をもつ岸本町大寺庵寺（37）と坂中庵寺（36）がある。

律令体制下では当地域は伯耆国会見郡に属しており、郡衙は官衙的配置をとる大形の掘立柱建物群が検出された長者屋敷遺跡（35）が比定されている。

この時期の集落には米子市青木遺跡、樋ノ口第4遺跡、諏訪西山ノ後遺跡、石州府第4遺跡（52）、上福万遺跡、今在家下井ノ上遺跡（38）などがある。樋ノ口第4遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎3枚、刀子、鏃先、墨状炭化物を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。ま

た、石州府第4遺跡では土馬やミニチュア土製品が、上福万遺跡では「奈」と書かれた墨書き土器が出土し、今在家下井ノ上遺跡では墨書き土器、縁釉陶器、赤色塗彩土器などが出土しており、これらの遺跡には官衙的な性格が窺える。

中世

南北朝から戦国期の動乱を背景として周辺には米子市石井要害(13)、橋本七尾城(15)、戸上城、飯山城、河岡城(49)、尾高城(42)などが築かれる。

古墓は米子市尾高御建山遺跡、日下古墳群(47)、上福万遺跡、青木遺跡、諏訪1号墳(29)、別所中原地下式横穴(28)、別所長峰古墓(27)がある。尾高御建山遺跡では一辺9.5mの方形周溝状の墓が確認されている。日下古墳群では斜面をし字状にカットして平坦面を造成し、ここに長方形の積石基壇を築いており、基壇内から五輪塔や藏骨器が出土している。諏訪1号墳、別所長峰古墓は方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を立てていたものと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓が3基検出された。経塚は米子市長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。

調査地が所在する米子市車尾は、鎌倉時代末期に深田氏によって開発されたと伝えられている。深田氏は戦国期には尼子氏に仕え、また、豊臣秀吉の九州出兵にも従ったという。なお、幕末に記された『伯耆志』によれば後醍醐天皇が隠岐へ配流の途中深田氏宅に車を止めたことから、「車尾」の地名がつけられたともいう。

近世・近代

近世の城下町米子の中心であった米子城は天正19年(1591)に東出雲・西伯耆・隨岐12万石の吉川広家によって築城が開始されるが、慶長5年(1600)には吉川広家は周防国岩国に転封される。これにかわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年(1609)に中村家は断絶し、その後、慶長15年(1610)に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡6万石を領有し、米子城主となる。やがて元和3年(1617)池田光政が因伯2国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永9年(1632)の国替えによって池田光仲が島取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治2年(1869)まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

米子市車尾は近世には車尾村と称し、村内を東西に伯耆街道及び出雲街道が横断しており、集落は街道沿いに並んでいた。藩政期の拝領高は611石余、本免は四ツ三分で、幕末の『六郡郷村生高竪付』には生高910石余、竪数194とあり、『伯耆志』には高768石余、家数197、人数840とある。

1 車尾7丁目西濱中遺跡	2 目久美遺跡	3 池ノ内遺跡	4 長砂第1遺跡
5 長砂第2遺跡	6 長砂第3遺跡	7 水道山古墳	8 大谷山横穴墓群
9 東宗像古墳群	10 宗像古墳群	11 奥谷堀越谷遺跡	12 日原6号墳
東宗像遺跡			
13 石井要害	14 奈喜良遺跡	15 橋本七尾城	16 吉谷龟尾ノ上遺跡
17 橋本德道西遺跡	18 吉谷上ノ原山遺跡	19 吉谷トコ遺跡	20 吉谷中馬場山遺跡
21 福成石佛前遺跡	22 福成早里遺跡	23 青木遺跡	24 福市遺跡
25 銚ノ口第4遺跡	26 銚ノ口第3遺跡	27 別所長峰古墓	28 別所中原地下式横穴
29 諏訪1号墳	30 諏訪西山ノ後遺跡	31 大袋丸山遺跡	32 三崎殿山古墳
33 諸木遺跡	34 宮尾遺跡	35 長者屋敷遺跡	36 坂中魔寺
37 大寺廃寺	38 今在家下井ノ上遺跡	39 中岡古墳群	40 尾高古墳群
41 尾高御建山遺跡	42 尾高城跡	43 尾高遺跡	44 岡成古墳群
45 尾高浅山遺跡	46 石田古墳群	47 日下古墳群	48 上福万妻神遺跡
49 河岡城跡	50 石州府古墳群	51 上福万遺跡	52 石州府第4遺跡

表1 周辺遺跡一覧表



第3図 調査地及び周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

車尾7丁目西濱中遺跡は米子市車尾7丁目に所在する。遺跡は標高4~7mの沖積地に立地し、調査地の東約300mには日野川が流れている。調査地の現況は造成が行われ工場の社宅地となっている。

調査区内の堆積状況は、水成堆積による砂が卓越しており、1区の北側では比較的安定した水平堆積が認められるが、1区の中央以南では不安定な堆積となっている。そのため調査区全体の統一的な基本層序は把握しがたいが、ここでは1区の北側での層序を基本層序としたい。基本層序は現地表面から造成土(第1層)、茶灰色砂質土(第2層)、灰白色細粒砂混じりの茶灰色砂質土(第3層)、淡灰色シルト(第4層)、灰色微細粒砂(第5層)、灰褐色シルト(第6層)、褐灰色細粒砂(第7層)、暗灰色細粒砂(第8層)となっている。第2層は社宅地造成前の旧表土あるいは旧耕作土であると考えられる。第4層と第6層は滯水的な堆積が考えられ、溝状遺構の埋土は、この第4層と同質である。また、第5層と第7層には細粒砂や粘土の小ブロックが認められ、流水によって攪拌された状況が窺える。なお、第6~8層には鉄分が混じり、特に第8層には砂鉄が密に包含されている。各層の堆積時期は出土遺物から第2層~第7層は近世以降、第8層は古墳時代前期頃であると考えられる。なお、1区の南側には第8層の直上に古墳時代前期頃の堆積層(B層)がある。

遺構はB層が残存している部分ではB層上面で、残存していない部分では第8層上面で検出した。

検出した遺構は近世以降であると考えられる溝状遺構8条である。

第2節 検出した遺構と遺物

S D - 01 (第6図)

S D - 01はS D - 02を切っており、北側はほぼ南北方向にのびるが、南側はわずかに西側に湾曲する。規模は現状で長さ36.0m、深さ5~10cmをはかる。幅については、湧水が著しいことと、削平のため遺構の遺存状態が良くないことから、東側の肩を平面的に確認できなかったため詳細は不明であるが、1区の南壁の土層断面では東側の肩を確認しており、これによれば幅は2.7mをはかる。

遺物は土師質土器の皿(1)が出土した。1の底部外面には回転糸切りが施されている。

時期は近世頃であると考えられる。

S D - 02 (第6図)

S D - 02は東側をS D - 01によって切られているが、東から南へ湾曲しながらのびている。規模は現状で長さ14.2m、幅1.5~2.1m、深さ5~10cmをはかる。埋土は第4層と同質である。

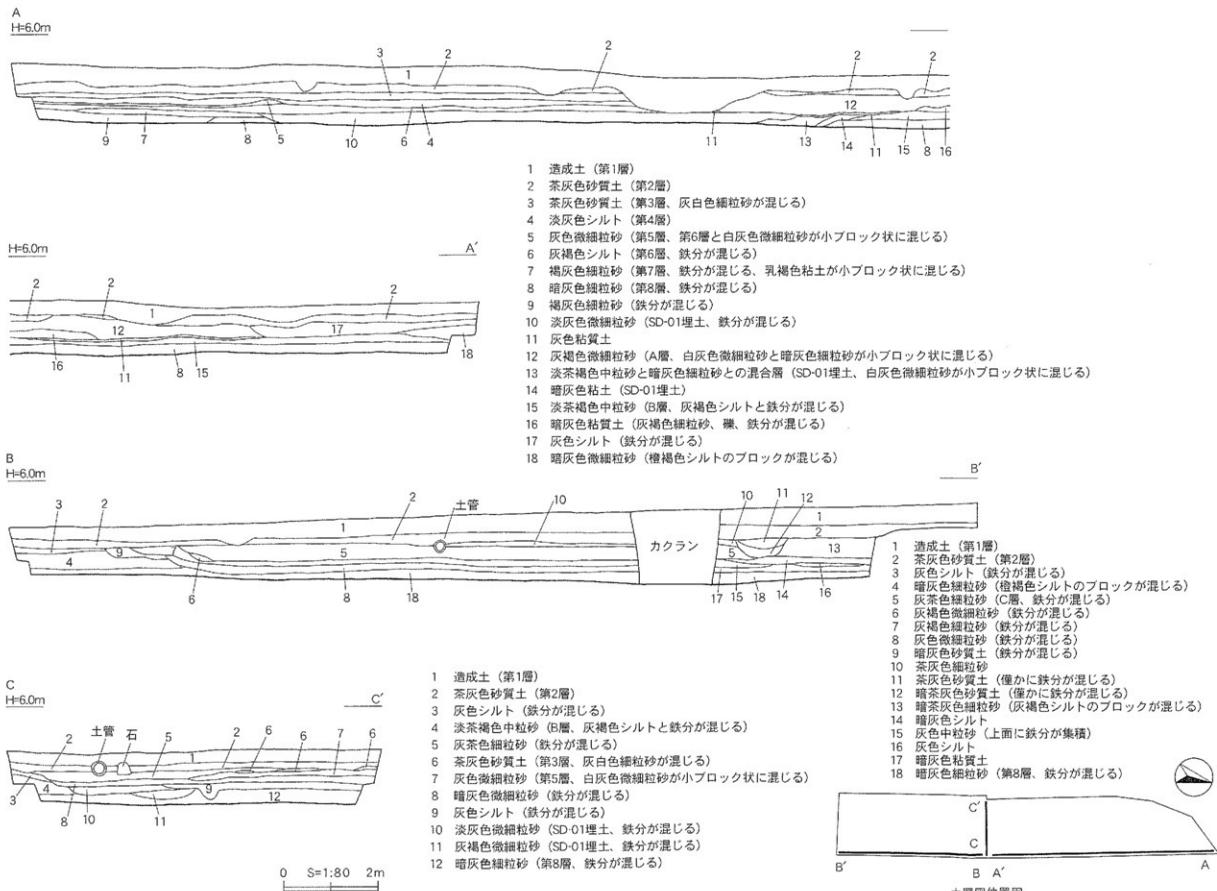
遺物は出土しなかった。

S D - 03 (第7図)

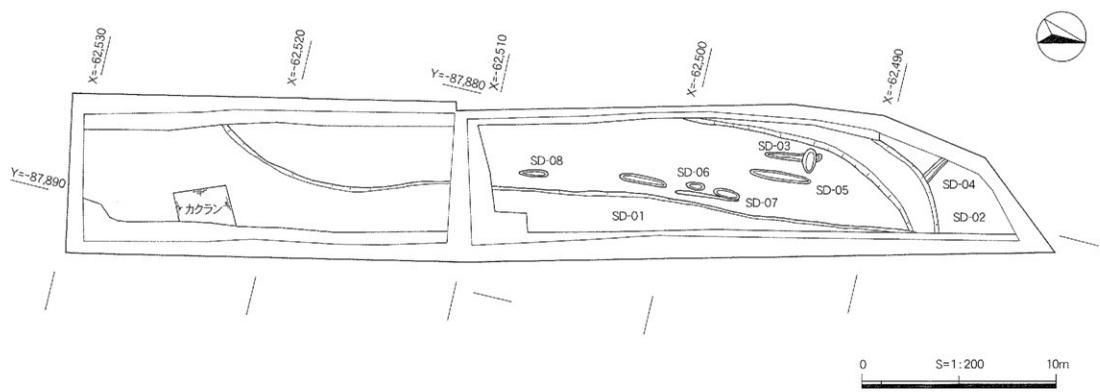
S D - 03は長さ3.0m、幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸方向はN - 8° - Wである。埋土は第4層と同質である。

遺物は磁器碗(2)が出土した。

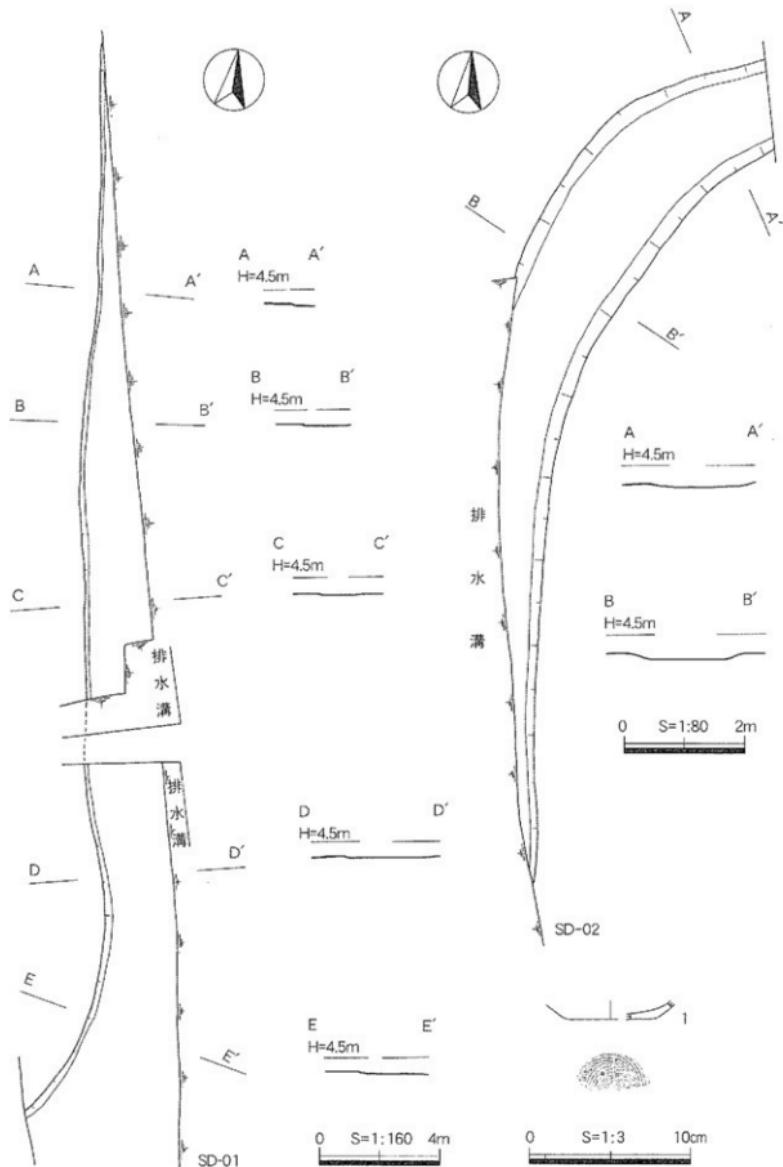
時期は近世頃であると考えられる。



第4図 土層図



第5図 遺構配置図



第6図 SD-01・02造構図及びSD-01出土遺物実測図

S D - 04 (第7図)

S D - 04は南東側を S D - 02によって切られているが、規模は現状で長さ1.6m、幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸方向はN - 63° - Wである。埋土は第4層と同質である。

遺物は出土しなかった。

S D - 05 (第7図)

S D - 05は長さ3.2m、幅0.3m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸方向はN - 3° - Wである。埋土は第4層と同質である。

遺物は出土しなかった。

S D - 06 (第7図)

S D - 06は削平によって3つに分断されているが、規模は北側から各々、長さ1.3m、幅0.4m、深さ0.1m、長さ0.9m、幅0.4m、深さ0.1m、長さ2.4m、幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸方向は北側から各々、N - 4° - W、N - 8° - W、N - 5° - Wである。埋土は第4層と同質である。

遺物は出土しなかった。

S D - 07 (第7図)

S D - 07は長さ3.3m、幅0.1~0.2m、深さ0.1mをはかり、主軸方向はN - 7° - Wである。埋土は第4層と同質である。

遺物は出土しなかった。

S D - 08 (第7図)

S D - 08は長さ1.4m、幅0.2m、深さ0.1mをはかり、主軸方向はN - 16° - Wである。埋土は第4層と同質である。

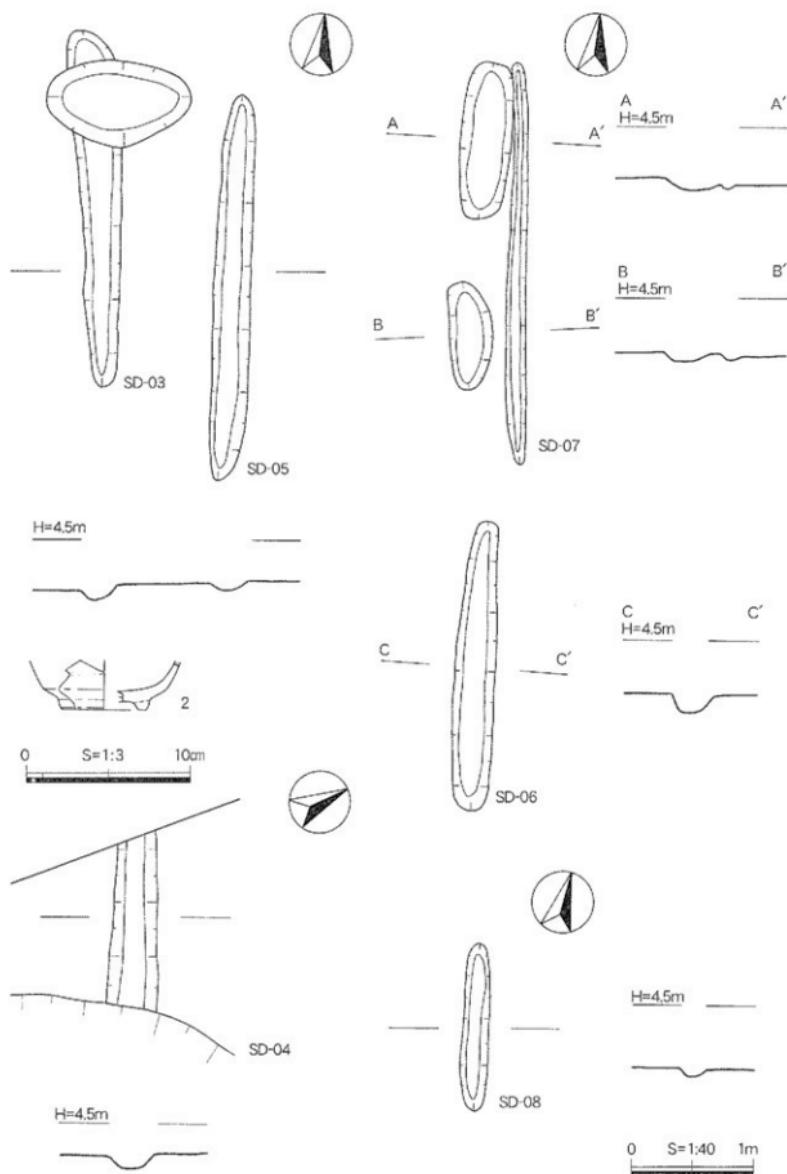
遺物は出土しなかった。

第3節 遺構外出土遺物 (第8図~第15図)

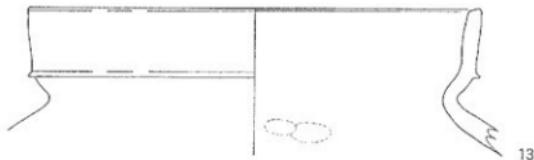
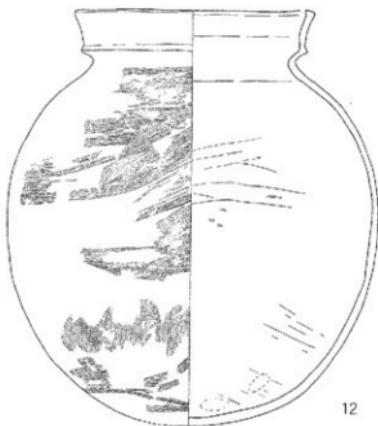
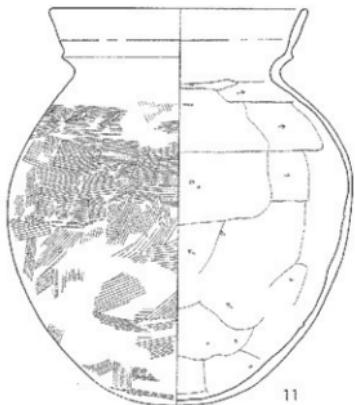
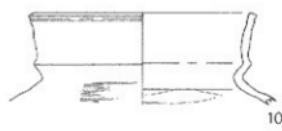
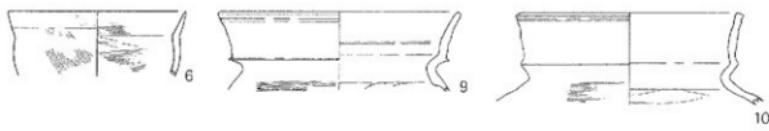
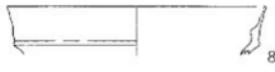
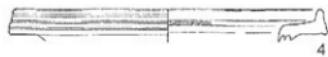
3~21は第8層から出土したものである。3、4は弥生土器の壺で、いずれも口縁部外面には3条の凹線が巡っている。5~20は土師器である。5、6は小型の壺で、5の口縁部は肥厚した短い複合口縁状を呈する。6は小型丸底壺で、内外面ともハケ調整が施されている。13~16は大型の壺で、16の外面には綾杉文が施されている。7~12は壺である。7、8は口縁部端部を欠損するが、9の口縁部端部は丸みをおびた平坦状を呈し、11の口縁部端部は丸くおさまる。また、10、12の口縁部端部は平坦面をなし、さらに10は外側へ僅かにつまみ出し、12は内側につまみ出している。17は低脚壺、18、19は高壺の脚部、20は器台である。21は埴輪で、外面にはハケ調整が施されている。

22~26はB層から出土したもので、いずれも土師器である。22、23は壺で、22は複合口縁を有し、23は口縁部が内湾気味に立ち上がる。24は壺あるいは壺の底部で、平底を呈するものと思われる。25は高壺あるいは器台の口縁部であると思われる。26は大型の壺である。

27、28は第7層から出土したものである。27、28は擂鉢で、27は口縁部端部を外側へ折り曲げて肥厚させている。28は底部で、外面には回転糸切りが施されている。

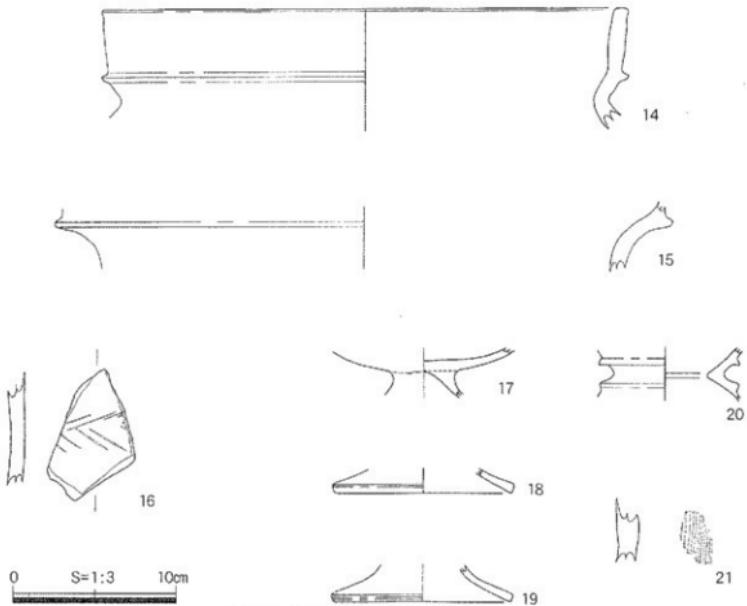


第7図 SD-03~08遺構図及びSD-03出土遺物実測図

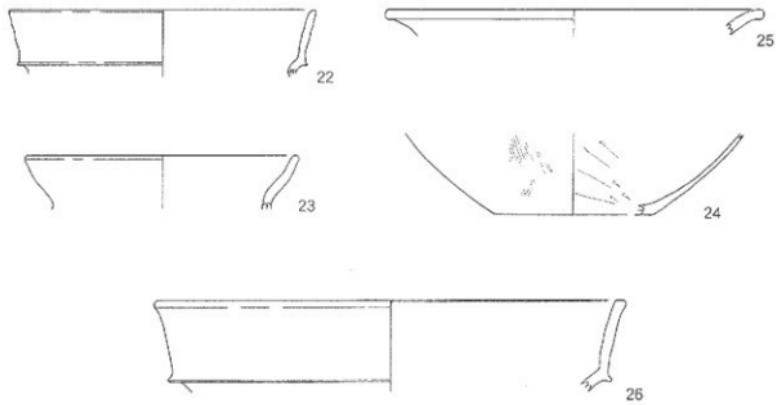


0 S=1:3 10cm

第8図 第8層出土遺物実測図(1)



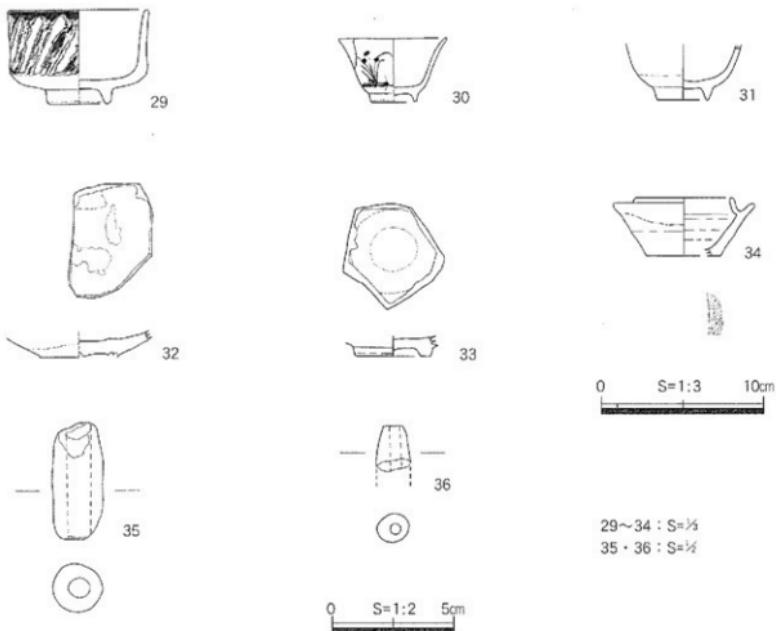
第9図 第8層出土遺物実測図（2）



第10図 B層出土遺物実測図



第11図 第7層出土遺物実測図



第12図 第4層出土遺物実測図

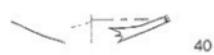


37

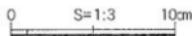
39



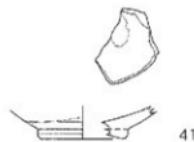
38



40

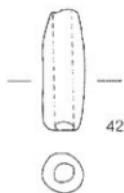


37~41 : S=1/3
42~44 : S=1/3

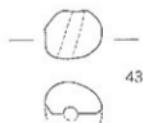


41

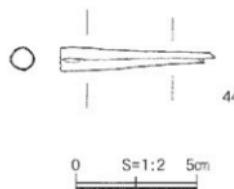
第13図 C層出土遺物実測図



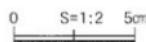
42



43



44



45



47



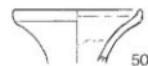
49



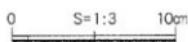
46



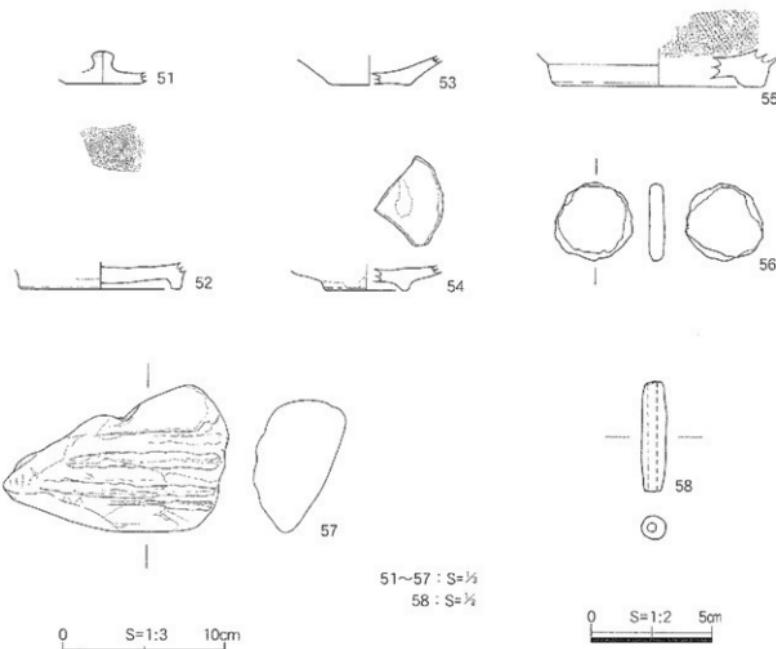
48



50



第14図 第2層出土遺物実測図（1）



第15図 第2層出土遺物実測図（2）

29～36は第4層から出土したものである。29、30は磁器で、29は筒形の湯飲み碗、30は小壺である。31～34は陶器で、31は壺、32、33は皿、34は灯明皿である。31、32は肥前系で、32の見込みには砂目積が認められる。33、34は在地系で、33の見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施され、34の底部外面には回転糸切りが施されている。35、36は管状土錘である。

37～44はC層から出土したもので、37は磁器皿、38～41は肥前系陶器、42は管状土錘、43は土玉、44は煙管の吸い口である。38は壺、39～41は皿で、41の見込みには砂目積が認められる。

45～58は第2層から出土したものである。45～50は磁器で、45、46は碗、47は小壺、48は筒型の湯飲み碗、49は仏飯器、50は青磁の花生である。51～55は陶器で、51は在地系、52～54は肥前系である。51はつまみを有する蓋、52は高台を有する底部、53、54は皿で、54の見込みには砂目積が認められる。55は擂鉢である。56は土器の脇部を転用した円盤状土製品で、縁辺部を打ち欠いて円盤状に加工している。57はかなり摩滅しているが、上面には4条の筋が認められ、玉作りに用いた砥石である可能性が高い。58は管状土錘である。

第4章 自然科学分析

車尾7丁目西濱中遺跡の珪藻分析

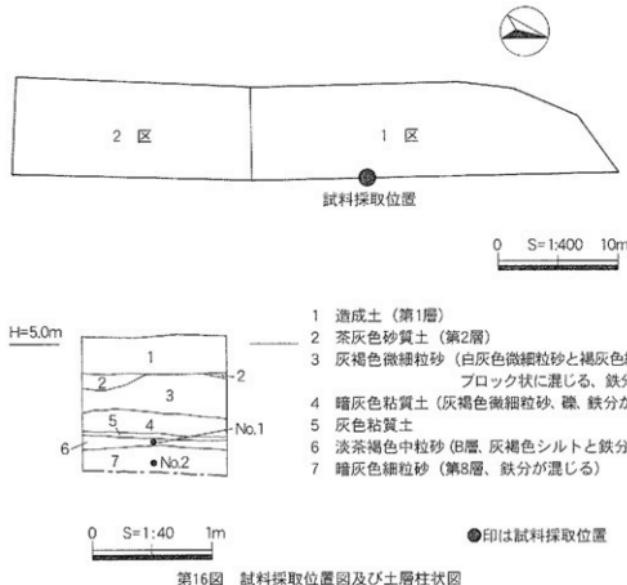
株式会社 古環境研究所

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試 料

試料は、1区東壁より採取された堆積物で、No. 1（淡茶褐色中粒砂）、No. 2（暗灰色細粒砂）の2点である。



第16図 試料採取位置図及び土層柱状図

3. 方 法

珪藻化石の分離・抽出は、定法にしたがい以下のように行った。

- 1) 試料 1 cm³を秤量する。
 - 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら 1 晚放置する。
 - 3) 上澄みを捨て細糸のコロイドと薬品を水洗後、水を加え 1.5 時間静置後上澄みを除去する。
この操作を 5、6 回繰り返す。
 - 4) 残渣をマイクロビペットでカバーガラスに滴下して乾燥する。
 - 5) マウントメディアによって封入し、プレバラートを作成する。
- 検鏡は、生物顕微鏡によって 600~1000 倍で行った。計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレバラート全面について精査を行った。

4. 結 果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、4 分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表に示す。以下に表記した分類群を記す。

Fragilaria capucina v. perminuta, *Navicula elginensis*, *Pinnularia borealis*, *Grammatophora macilenta*

2) 硅藻群集の特徴

N o. 1 (淡茶褐色中粒砂)、N o. 2 (暗灰色細粒砂)ともに珪藻密度は極めて低い。出現した分類群は、陸生珪藻の *Pinnularia borealis*、流水性種で沼沢湿地付着生の *Navicula elginensis*、不定性種の *Fragilaria capucina v. perminuta*、真塩性種（海水生種）の *Grammatophora macilenta* と多様である。

表 2 車尾 7 丁目西済中遺跡の珪藻分析結果

分類群	I区東壁	
	1	2
貴塩性種（淡水生種）		
<i>Fragilaria capucina v. perminuta</i>	1	
<i>Navicula elginensis</i>		1
<i>Pinnularia borealis</i>	1	2
真塩性種（海水生種）		
<i>Grammatophora macilenta</i>		1
合計	1	5
未同定	0	0
破片	1	1
試料 1 cm ³ 中の個数密度	4.0	2.0
	$\times 10^2$	$\times 10^3$
完形殻保存率 (%)	50.0	83.3

5. 硅藻分析から推定される堆積環境

分析結果から、No. 1（淡茶褐色中粒砂）、No. 2（暗灰色細粒砂）の堆積物には、硅藻がほとんど含まれておらず、淘汰により硅藻などの微細遺体が堆積されなかつたか、硅藻が生育できない乾燥した環境であったことが示唆される。試料となった堆積物が中粒砂ないし細粒砂であることからすれば、前者である可能性が高い。

以上から、1区東櫻のNo. 1（淡茶褐色中粒砂）、No. 2（暗灰色細粒砂）の堆積した当時は、水流により淘汰を受ける環境であったことが推定される。

参考文献

- Hustedt,F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15, p. 131-506.
- Patrick,R.eimer,C.W. (1966) The diatom of the United States,vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644 p .
- Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333 p ., National Environmental Research Center.
- Patrick,R.eimer,C.W. (1975) The diatom of the United States,vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213 p .
- Asai,K.&,Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産硅藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生硅藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生硅藻による古環境解析とその意義 -わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.

第5章 まとめ

今回の調査では、溝状遺構8条を検出したのみである。これらの遺構の時期は、SD-01とSD-03の出土遺物から近世以降のものであると考えられ、SD-01とSD-02は自然河川、SD-03～SD-08は耕作に伴うものであると考えられる。なお、栽培作物についてはプランツ・オパール分析及び花粉分析を行っていないため不明である。

第8層及びB層からは古墳時代前期の遺物が比較的まとまって出土した。図示できるものは少ないが、大型の壺の破片が多く出土し、埴輪片(21)も出土していることから、周辺に古墳が存在していたものと考えられる。また、調査地の西側に隣接する国立米子病院では、病棟工事の際に円筒埴輪が出土し⁽¹⁾、調査地の北西約1.2kmにある日本たばこ産業米子工場内では、合口壺棺が出土したと伝えられている⁽²⁾。この他に、米子平野の沖積低地から埴輪が出土した例としては、錦町第1遺跡⁽³⁾と博労町遺跡⁽⁴⁾があり、当遺跡と国立米子病院、博労町遺跡、錦町第1遺跡はほぼ東西に一直線上に並んでおり、これに沿って砂丘列が存在し、この砂丘列上に古墳が築造されたものと考えられる。

調査地及びその周辺には、「浜」や「江」のつく小字が数多く存在し、ある時期、水辺の景観を呈していたものと推測される。そこで、古墳時代前期の堆積層である第8層とB層の堆積環境を明らかにするために珪藻分析を行ったが、いずれも水流による淘汰を受けており、残念ながら有意な結果を得ることができなかつた。

註

- 1 (財)鳥取県教育文化財団 1981 『山陰のはにわ』
- 2 米子市教育委員会 1994 『米子市埋蔵文化財地図』
- 3 平木裕子 1996 『錦町第一遺跡』 (財)米子市教育文化事業団
- 4 下高瑞哉 2003 『平成12・13年度 米子市内遺跡発掘調査報告書』 米子市教育委員会



- 1 錦町第1遺跡 2 博労町遺跡
3 日本たばこ産業米子工場（伝合口壺棺出土）
4 国立米子病院 5 車尾7丁目西濱中遺跡

0 S=1:30,000 1km

第17図 米子平野平地部における古墳関係遺物出土遺跡分布図

表3 遺物観察表

遺物番号	発見番号	出土地点	種類	着色	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	手 法 上 の 特 徴	胎土	焼成	色	測	備考
1	6	SD-01	土器	黒		△ 1.2	■ 5.6	外面:底部削除	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
2	7	SD-03	器	白		△ 3.0	■ 5.1				内面:白色 外面:白色		附器身付
3	8	2区 B-10 第8層	弦生土器	白	■ 19.6	△ 4.3		内面:ハケ調整 外面:口縁部3条の凹部、摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
4	8	2区 B-10 第8層	弦生土器	白	■ 18.8	△ 1.9		内面:摩滅のため調整不明 外面:口縁部3条の凹部、摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
5	8	1区 A-3 第8層	土器	白	■ 7.6	△ 3.9		内面:ハラケズリ? 外面:ヨコナデ	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
6	8	1区 A-4 第8層	土器	白	■ 10.8	△ 4.1		内面:ハケ調整 外面:ハケ調整	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色	少堅丸底蓋	
7	8	1区 B-5 第8層	土器	白		△ 3.3		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
8	8	1区 A-3 第8層	土器	白	■ 15.8	△ 3.6		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
9	8	1区 A-5 第8層	土器	白	■ 14.6	△ 4.8		内面:口縁部ヨコナデ、肩部ハラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ、肩部ハケ調整	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		外縁黒付着
10	8	1区 A-3 第8層	土器	白	■ 13.2	△ 5.6		内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ調整	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
11	8	1区 B-8 第8層	土器	白	15.5	21.4		内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ調整	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
12	8	1区 A-3 第8層	土器	白	14.7	25.4		内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハラケズリ 外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下ハケ調整	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
13	8	2区 B-9 第8層	土器	白	■ 27.6	△ 9.0		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
14	9	2区 B-10 第8層	土器	白	■ 32.1	△ 7.4		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
15	9	1区 A-2 第8層	土器	白		△ 4.3		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
16	9	2区 B-10 第8層	土器	白		△ 8.1		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明、横移文	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
17	9	1区 A-3 第8層	土器	白		△ 2.0		内面:ナデ 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
18	9	1区 A-3 第8層	土器	白	■ 1.5	■ 10.8		内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		
19	9	1区 A-3 第8層	土器	白		△ 2.3	■ 10.8	内面:ナデ 外面:ナデ	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色		

遺物番号	種別番号	出土地点	種類	看板	1段(cm)	最高(cm)	幅深(cm)	手 法	上 の 特 徴	着土	焼成	色 調	備考
20	9	1区 A-3 第8層	土 鋸 器	鋸 台		△ 3.7			内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色	
21	9	1区 B-5 第8層	鋸 刃			△ 2.2			内面:摩滅のため調整不明 外面:ハケ調整	密	良好	内面:褐色 外面:褐色	
22	10	1区 A-4 B 層	土 鋸 器	鋸	※ 18.8	△ 4.1			内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	密	良好	内面:褐色 外面:褐色	外箱黒瓦
23	10	1区 A-4 B 層	土 鋸 器	鋸	※ 16.6	△ 3.3			内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色	
24	10	1区 A-4 B 層	土 鋸 器	鋸or鋸		△ 5.0	※ 10.0		内面:ヘラケズリ 外面:ハケ調整	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色	
25	10	1区 B-5 B 層	土 鋸 器	鋸or鋸 鋸 台	※ 23.0	△ 1.5			内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:褐色 外面:褐色	
26	10	1区 A-2 B 層	土 鋸 器	鋸	※ 28.6	△ 5.6			内面:摩滅のため調整不明 外面:摩滅のため調整不明	密	良好	内面:淡褐色 外面:淡褐色	
27	11	1区 A-1 第7層	陶 器	器	※ 30.0	△ 3.8						内面:茶褐色 外面:茶褐色	
28	11	1区 A-1 第7層	陶 器	器		△ 6.5	※ 1.4		外面:底部四枚余切り			内面:淡褐色 外面:淡褐色	
29	12	1区 A-3 第4層	陶 器	湯掛	※ 8.4	5.8	重 3.4					内面:白灰色 外面:白灰色	
30	12	1区 B-1 第4層	陶 器	小 环	※ 6.5	△ 3.9	重 2.8					内面:灰白色 外面:灰白色	肥前系
31	12	1区 B-1 第4層	陶 器	壺		△ 3.1	重 3.2					内面:灰褐色 外面:灰褐色	肥前系
32	12	1区 A-4 第4層	陶 器	壺		△ 1.6			内面:足込み砂目積			内面:灰褐色 外面:灰褐色	肥前系
33	12	1区 B-1 第4層	陶 器	壺		△ 1.3	4.5		内面:足込み蛇ノ目堆积			内面:暗褐色 外面:淡褐色	在地系
34	12	1区 B-3 第4層	陶 器	印彫壺	※ 6.0	△ 3.6	重 4.6		外面:底部四枚余切り			内面:淡茶色 外面:淡茶色	在地系
35	12	1区 B-2 第4層	土 壺		長△4.8	最大幅 2.1				密	良好	淡褐色	
36	12	1区 B-1 第4層	土 壺		長△1.9	最大幅 1.5				密	良好	暗褐色	
37	13	2区 A-9 C 層	陶 器	壺	※ 13.7	△ 2.2						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系
38	13	2区 B-8 C 層	陶 器	壺		△ 1.7	重 3.0					内面:灰褐色 外面:灰褐色	肥前系
39	13	2区 A-10 C 層	陶 器	壺	※ 12.7	△ 1.8						内面:灰白色 外面:灰白色	肥前系

遺物番号	発掘番号	出土地点	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	手法	土の質	微	胎土	焼成	色	調	備考
40	13	2区 A-10 C層	陶器	皿			△ 1.7					内面:灰白色 外面:灰白色	肥前系		
41	13	2区 A-10 C層	陶器	皿			△ 2.1	※ 5.2	内面:見込み形目模			内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
42	13	2区 B-8 C層	土器	縦	長 4.9	最大幅 1.7					密	良好	茶褐色		
43	13	2区 A-9 C層	土器	縦	長 2.0	最大幅 2.3					密	良好	淡褐色		
44	13	2区 A-8 C層	鉢	輪	径 6.3	最大幅 1.0									
45	14	1区 A-1 第2層	鉢	輪	径 15.1	△ 3.2						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
46	14	1区 B-3 第2層	鉢	輪	径 11.2	△ 4.9						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
47	14	1区 A-1 第2層	鉢	小環	径 8.7	△ 2.8						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
48	14	1区 A-2 第2層	鉢	輪	径 8.4	△ 4.4						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
49	14	2区 A-7 第2層	鉢	器	径 6.1	△ 2.6						内面:白灰色 外面:白灰色	肥前系		
50	14	2区 A-7 第2層	鉢	器	径 7.8	△ 3.3						内面:淡緑色 外面:淡緑色	青磁		
51	15	2区 A-7 第2層	陶器	蓋		2.0						内面:绿灰色 外面:淡褐色	在施系		
52	15	2区 A-10 第2層	陶器	底部		△ 1.7	9.8					内面:暗緑色 外面:暗緑色	肥前系		
53	15	1区 A-2 第2層	陶器	皿		△ 1.8	※ 5.2					内面:白灰色 外面:茶褐色	肥前系		
54	15	2区 A-10 第2層	陶器	皿		△ 1.5	※ 5.0	内面:見込み形目模				内面:乳白色 外面:茶褐色	肥前系		
55	15	1区 A-1 第2層	陶器	全体		△ 21.5	※ 12.5					内面:茶褐色 外面:茶褐色			
56	15	1区 A-3 第2層	円盤	状	径 4.7	厚 0.9					密	良好	内面:褐色 外面:褐色		
57	15	1区 A-5 第2層	磨石		長 13.9	最大幅 9.1	最大厚 5.6								
58	15	1区 A-2 第2層	土器	縦	長 4.6	最大幅 1.0					密	良好	茶褐色		

図 版



1区全景（北から）



1区全景（南から）

図版 2



SD-01 (北から)



SD-01 (南から)



SD-02 (東から)



S D - 02 (南から)



S D - 03・05 (南から)



S D - 03・05 (北から)

図版 4



2区全景（北から）



2区全景（南から）



2区第8層
遺物（11）出土状況



1



2

1 : SD-01
2 : SD-03
3~12 : 第8層



3



4



5



6



7



8



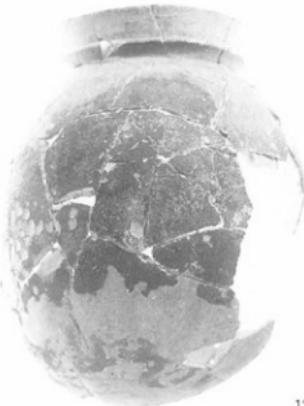
9



10



11



12

出土遺物（1）

図版 6



13



15



14



16



17



18



19



20

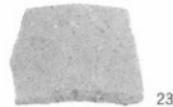


21

13~21: 第8層
22~26: B層



22



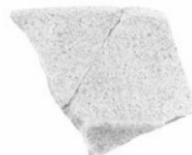
23



24

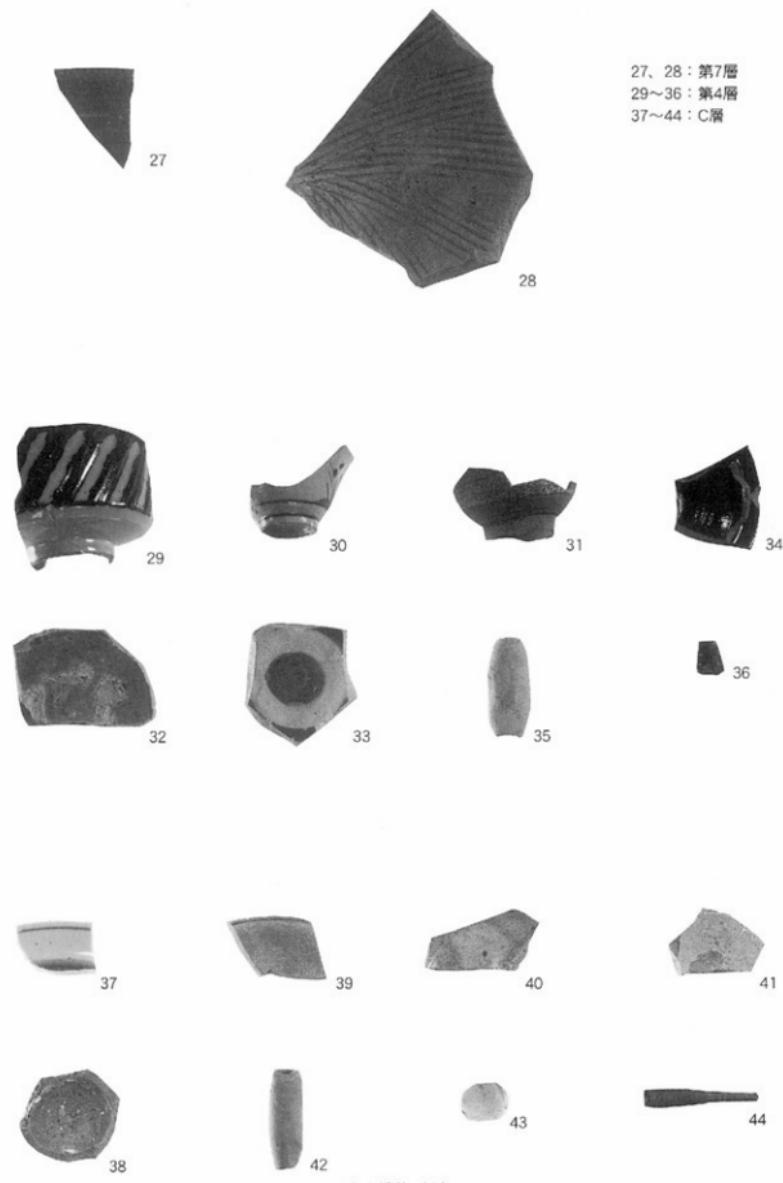


25

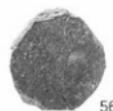
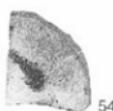
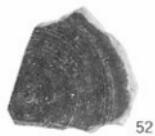
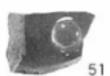
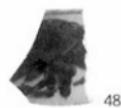
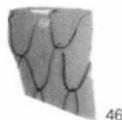


26

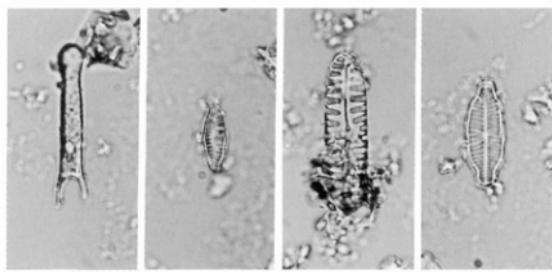
出土遺物 (2)



図版 8



出土遺物 (4)



1. *Grammatophora macilenta*
2. *Fragilaria capucina* v. *perminuta*
3. *Pinnularia borealis*
4. *Navicula elginensis*

— 10 μ m

珪藻の顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	くずも7ちょうめにしはまなかいせき							
書名	車尾7丁目西濱中遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	48							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL・FAX (0859) 22-7209 eメールアドレス maibun @ sanmedia.or.jp							
発行年月日	西暦 2004年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因	
車尾7丁目西濱中 遺跡	鳥取県米子市 車尾7丁目	31202			35度 25分 58秒	133度 21分 54秒	20030606~ 20030724	500m ² 県道車尾上福原 線緊急地方道路 整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
車尾7丁目西濱中 遺跡	散布地	古墳時代 近世以降	溝状遺構	弥生土器 土師器 陶磁器 土鍤 墳輪 砥石 煙管				

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書48

車尾7丁目西濱中遺跡

2004年3月

編集・発行 財團法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 烏取県米子市長砂町935-1

印 刷 今井印刷株式会社